

■小菅優、「ベートーヴェン詣」を語る——兼松講堂公演に寄せて

聞き手：高坂はる香(音楽ライター)

—2011年から行ってきた8回に亘るベートーヴェンのピアノ・ソナタ全曲演奏会が、先に最終回を迎えたところですが、再び「ベートーヴェン詣」と題した新シリーズを始められます。引き続きベートーヴェンに取り組まれるのはなぜでしょうか？

他の作曲家を演奏しながらも、同時にベートーヴェンはずっと弾き続けたいと思っています。ベートーヴェンは私にとって、人生をともに歩んでいく作曲家です。ピアノ・ソロの曲だけでなく、協奏曲、室内楽、歌曲と、発掘していくと素晴らしい作品がたくさんあります。「ベートーヴェン詣」は、“一つ一つの曲に尊敬の念をもって詣でる”という気持ちで臨むプロジェクトです。それぞれの作品の魅力を精一杯引き出したいと思っています。

今回演奏する「ピアノ四重奏曲」はあまり演奏される機会がありませんが、とても魅力のある作品です。若い頃に書かれているので、今後の成長を感じさせる部分もありますが、同時にすでにベートーヴェンらしさがはっきり現れています。シンプルで、メロディやハーモニーがあまり動かないので、それをどのように表現するかも難しいところ。だからこそ、素晴らしい共演者を集めなくてはと思い、昔から信頼している3人をお願いしました。

—共演者のお三方は、小菅さんにとってそれぞれどのような存在ですか？

ヴァイオリンの川久保賜紀さんとは、以前から室内楽でよく共演していて、去年はドイツで10公演ほどのツアーを一緒に回りました。今度アメリカで、ベートーヴェンのトリプル・コンチェルトを共演します。ヴィオラの川本嘉子さんとは、(長らく共演を重ねているヴァイオリニストの)榎本大進さんを通して知り合いました。水戸やサイトウ・キネンなどで何度も共演しています。

そして、チェロの趙静さんと最初に会ったのは、私がまだ12歳のとき。日本で行われた日独交流コンサートに、私はドイツの代表としてトリオで出演しました。そのパーティーで、当時高校生だった趙静さんが、すごい天才チェリストだという紹介で演奏を披露していました。その演奏がものすごかったのを今も覚えています！それからしばらく会う機会がありませんでしたが、20代になって再会し、共演するようになりました。

—女性4人のカルテットですが、みなさんには音楽的な共通点などありますか？

それぞれ個性はまったく違いますが、共通しているのは、温かい人間的な音楽を好んでいるところです。あとは、全員あまり女性っぽくないかも(笑)。そして動物的な部分があるというか、感覚がいいと思います。

—……では、それぞれを動物に例えると？

それはちょっとわかりません(笑)。変なこと言ったら怒られちゃうので！

—ところで、ベートーヴェンのソナタ全曲録音と演奏会を終えて、新しい発見はありましたか？

ベートーヴェンは葛藤を抱えて生きていた人ですが、まじめさの中に、ユーモアや皮肉、ひねくれた部分など、人間らしいところがあると感じるようになりました。

32曲の一連のソナタは、徐々にロマン派に近づいていくというよりは、いろいろな要素が混在する形で発展していると思います。後期ソナタにバロックや古典派の影響が見えたり、中期でもかなり斬新なところがあったり。

例えばシェイクスピアからの影響が表れている作品もあります。

画家のカンディンスキーにも同じものを感じますが、まるでカメレオンのように変化する多様な作品を書いているので、全作品を見ていくことで、答えだけでなく謎も増えていきました。ベートーヴェンはさまざまなことを哲学的に考えた人だと思いますが、最終的には、人間へのメッセージと平和への訴えを、音楽を通して表現しています。

—今回はピアノ四重奏曲とソナタによるプログラムです。それぞれの作品についての考えをお聞かせください。

二長調のピアノ四重奏曲と、二短調のピアノ・ソナタ「テンペスト」は、雰囲気も作曲時期も異なる2曲です。「テンペスト」には、中期の斬新さがあちこちで見られます。男らしく力強い面もあれば繊細な面もある。倍音や不協和音の響きを楽しむようなところがあって、ペダルの効果ひとつで、全く違う世界にいつしてしまうような表現にもなります。幻想的な作品です。

ピアノ・ソナタ第1番には、他の作品で使われているいろいろなメロディが現れます。初期作品でありながら中期のような深さがあり、ダイナミクスが繊細です。今回演奏するハ長調のピアノ四重奏曲の2楽章と同じメロディも登場しますが、四重奏曲では古典的な進行だったものが、ソナタで使われるときには儚いハーモニーで進行していき、優しさが増えています。聴き比べると感動します。

実は、1番のソナタを勉強したときから、いつかこのピアノ四重奏曲とつなげて演奏してみたいと思っていました。6年前から考えていたことが、やっと今回実現します。

兼松講堂は、歴史のある素敵なホールだと聞いているので楽しみです。今回の演奏会では、信頼している仲間たちと、この場所でしか起きない対話をできたらと思っています。

(了)

* 聞き手の音楽ライター・高坂はる香さんは、一橋大学大学院社会学研究科修士課程修了。
(株)ショパンに勤務、「月刊ショパン」編集長を務め、現在、クラシック音楽のフリーライターとして内外の著名音楽コンクールでも活躍する傍ら、大学院時代のテーマでもあったインドスラム支援プロジェクトにも取り組んでいる。